

迎祥奉句の佐野山長福寺俳額

一、奉納場所 千曲市桑原佐野薬師寺

一、奉納年月 天保十五年（一八四四）陰曆八月

一、句数 三十六。迎祥別格。願主は桑原連

奉納

山てらへこゝろの

まわる月見かな

迎祥

水草のそれにも露の置にけり

はるぞの 雲裳

下萌や雪間くの零れ表

四明庵又霧谷山人

旭海

夕だちの模様にもなる五月哉

関保綱 瓜僊

鶉遣ひの上手を母のうらミかな

虎鼠庵

都久裳

旅駕の続（い）て来るや劇草

南沢 南谿

庭先の菜のはなうつる障子哉

小山

晴水

ながめさへかへらぬ軒のあやめ哉

関久篤 溪水

麦秋のねてからしたる掃除かな

一虎

鳥一羽見えず広野の雪のくれ

堀内正行 柏子

はる雨やふつくりミゆる草の庵

宮原

一二

鶏のそらときつくる桜哉

唐沢 碧水

そだちから水にはなれて柳ふく

丸山

は万子

藻公英の花となりけり今朝の雨

唐沢 吼水

余年なきあそびやうなる小鴨かな

丸山

其峰

よく見ればうちの人なりすゝ払

唐沢高貴 融々

暮たればまた神がきのもミぢ哉

寺島

如松

西上人を

雪どけや去年のもみぢのながれ来る

宮山堂

蝸牛

花雪に身をかす人やふじの山

関 一貴

人ごゝろかうもありたき柳かな

佐野山主

栄山

何処までも野のけしきなり春の海

柳沢 絮光

裸木の中に辛夷の月夜かな

瓜隠居

白兔

まどかなるは転びやすきといへは

友まとひしてなき立る衛かな

度月

よきほどの苦ミひめけり露の臺

関台完 蘭齋

ある時は萩もさそふや落し水

（杭瀬下）

一朗

名月や二度めの鶏も寒からず

翫月窓 文戯

眼移りに買そこなふや宮角力

芳国

家かりて曙侍む山ざくら

瑛水

天保申辰仲秋吉旦

桑原 蓮

流れゆく水にもとめてけふの月

姥ヶ獄

桂蔭

とりくの人の見やうや宮角力

行司

木村源次郎

この俳額は長福寺本堂軒先の正面に掲げられていたが、

今越た山に日の入るすゝきかな

徳島

錦穠

昭和三十八年四月本堂は取り壊されて、地元西区公民

幸ひに鎌を持ちけり初子の日

唐沢昌風

東春

に掲額されていたものである。

朝雲や花にまぎるゝ山もなき

丸山

蘭児

## 額面の俳人名

迎祥（げいししょう）

千曲の人。小林 昶。別号言流舎。瑞翁。広島県福山市の人といわれている。福山藩阿部家の臣という諧を江戸の茂呂何丸にまなんだが、何丸の長子尺木堂公石の妻やしほ（のち雲裳）と密通、信州へ駆け落ちしたといわれている。天保中頃小布施町に定住、しばらく俳諧、書道を教えた。天保十年頃千曲市桑原の本陣柳沢家の食客となり（当主臈我は迎祥門人）、のち桑原西区の天神堂へ移って寺子屋を開いた。さらに同地関長堯家のはなれに住んだ。桑原の言流橋は迎祥の号言流舎に由来する。嘉永四、五年頃、千曲市稻荷山の城小路に移住、多くの門人を育て安政六年十一月十六日没。五十四歳。門人の中には小出八郎右衛門、和田群平、松田穂並、関長堯らこの地方の近代に活躍した。法名言流舎瑞翁迎祥居士。同市小坂の龍洞院に墓と位牌がある。

旭海（きょうかい）

上山田の人。安藤慈稟。同地東国寺二十二世。文政頃一茶と交遊があったともいわれる。

都久裳（つくも）

千曲市新田の人。本姓は碓田。別号鼠庵は弘化元年秋、中村碓嶺が新田の碓田宅に長逗留し、「虎鼠庵記」を書いたのがはじまり、この年都久裳は宗匠としての文台もいただいたか。

## 参考文献

本内容は高野六雄著「東北信地方の俳額史」および長野郷土史研究機関誌長野（第一七四号、1994の2）平成六年三月発行、を参考に、千曲市桑原郷土史家堀内暉巳氏の指導によりまとめる。